

平成 25 年度第 2 回伊勢志摩定住自立圏共生ビジョン懇談会 結果概要

◆日時 平成 26 年 1 月 29 日（水）19：00～21：00

◆会場 伊勢市役所本庁舎 4 階 4-5 会議室

◆出席委員

齋藤 平委員、大津春久委員、木村成吾委員、西山 敦委員、大西 栄委員
西村純一委員、早川正素委員、小見山健司委員、山崎勝也委員、中村 功委員
田村重幸委員、畑 芳晴委員、東谷泰明委員

◆欠席委員

岩崎良文委員、奥田昌利委員、前田政吉委員、米倉敦也委員

◆出席職員

情報戦略局長、行政経営課長、行政経営課政策係長、行政経営課政策係主事 2 名、
健康課長、こども課こども育成係長、病院事務部参事、商工労政課長、農林水産課長、
観光企画課長、産業支援課企業誘致係長、交通政策課長、都市整備部次長
生涯学習スポーツ課課長補佐、教育研究所長、広報広聴課長、職員課長

◆内容

1 伊勢志摩圏域の現在と将来について懇談

(1) 事務局からの説明

- ・伊勢志摩定住自立圏共生ビジョン（素案）について

(2) 伊勢志摩圏域の現在と将来について【懇談】＜懇談概要は別紙＞

- ・圏域における現状、課題、強みなど
- ・圏域の将来像について
- ・圏域づくりの基本的な取組方針について

○鳥獣被害について

- ・観光と直結する部分においても被害が出ている。朝熊山の金剛證寺ではつつじ・あじさいなどが有名であり、つつじ祭やあじさい祭を行っている。しかし、鹿の被害がひどい。猪も出てきて手を焼いている。寺なので狩りは行わないので野放しになっている。実際、あじさい祭はやめてしまった。また、地域においては狩りをする猟師が少なくなってきたこともあり、増え続けているという現状があると耳にする。
- ・鳥羽にあるハイキングコースも猪の被害を受け、穴だらけになっていて、歩くことが困難な状態になっている。その補修作業をボランティアの方にしてもらっているなど、困惑している。答志島でも猪が出ると聞いている。
- ・現状、経済規模でどの程度の作物被害等があるのかを数字で示し、目標としてどれくらいを目指すのかを明らかにすると具体的にイメージができて良いと思う。
- ・鳥獣被害に関わらず数値データを把握していくことは大切であると思う。
- ・実際問題として、鳥獣被害を防止するためには捕獲するしかないのだろうか。
- ・農業をやっているが、自分自身が檻（金網）の中に入って作業をしているというような状況である。このようにしないと農作物が作れない状況であり、これがこの地域の現状である。
- ・捕獲をする方たちが高齢化しており、後継者の育成に関して、色々な取組もやっているが、担い手の問題が大きいと思う。自分も鳥獣被害を受けているが、自分で猟をしようとはやはり思えない。
- ・海においても、鵜などによる被害が出ている。養殖網や定置網の中に入って、漁獲物を傷めるとか、海苔などの芽などを食べるなどの被害が出ている。
- ・農業をやりたくても、鳥獣被害の要因が大きくてできない現状がある。

○第1次産業の担い手について

- ・漁業に関わらず、第1次産業について回る話であるが、高齢者が多くなっている。漁業に関して言えば、県下的、全国的な状況として、従事者の平均年齢は60代半ばから60代後半である。
- ・後継者が育たない要因としては、事業として生計が成り立たないことである。漁に出ても以前のように漁獲が得られないなどの資源的な問題もあるし、また獲れても、単価が上がらないなどの流通、経済に関する問題がある。漁業者として定住が進まないことが最も大きな課題である。
- ・各市町で得られる産物を一体化し、地域においてPR、販促を行い、その相乗効果によって、まちの活性化を図ることができると考える。場合によっては、第1次産業における従事者の増加に繋がることも考えられる。
- ・三重外湾漁協管内では、県下の漁獲の半分くらいを誇っており、魚種も多種多様である。こういったものをまちとして、地域として県内外に産物をPRすることによって、観光の誘客に繋がったり、色々なことに繋がると考えている。現在の取組と

しては、地元だけでなく伊勢、津、名張などへ保冷車で出かけて販売している。これらの取組により、南伊勢町に関心を持っていただき、津市の方が南伊勢町まで来ていただき、魚を買っていただくような例もある。

- ・魚を子どもたちに食べてもらうことは、食育などの様々な教育面に良い影響を与えていると考えている。漁業という産業から様々なことに派生していくと考えている。このことは農業についても同じことが言えると思う。一体となって取り組めればと考えている。
- ・鳥羽では7月に鳥羽マルシェという施設が完成する予定である。農協と漁協がタイアップし、食事処や物産の直売所ができる。第1次産業については、先細りの状況であり、この問題解決に協力するために、観光と漁業などの第1次産業とが連携して、今後取り組んでいこうという考えに基づいた取組である。
- ・南伊勢町で養殖されている伊勢マグロの消費・供給先として、鳥羽の旅館が連携した取組を行っている。業種業態は違っても、様々な形で連携していくことが必要である。
- ・伊勢志摩圏域は、古代から、「島之速贄（しまのはやにえ）」という言葉が古事記にも出てくるくらい、海産物が豊かな地域である。この地域の文化的な背景にもなっているにもかかわらず、担い手が減少していくことは寂しい。圏域全体で考えていくべき課題である。
- ・生産者が加工して付加価値を付けて産業化していく6次産業の取組に対して市町の職員がマネジメントの研修を受けることも有効であると考えている。百五銀行さんが6次産業のファンドを創設したところでもあるし、民間のコンサルに頼るだけでなく、行政職員が相談を受けたときに、何かしらの道を示せるようになればよいと考える。
- ・空き家が増加しているが、空き家バンクなどの制度を各エリアで持ち、それを情報共有、情報発信し、例えば、漁業や農業などの従事者を受け入れるなどの取組を行ったらどうか。立派な家もたくさんある。また、築何十年も経過している古い空き家については、倒壊の危険性があり、災害時においては、避難道を阻害する恐れがある。高齢者同士が空き家で子どもたちの面倒を見るなど、コミュニティの場として活用すればどうか。空き家を活用することで地域を活性化し、人口減少に歯止めをかけると共に、新しい取組を積極的に行い、伊勢志摩というネーミングが広がれば良いと思う。
- ・第1次産業の担い手を確保する取組を検討して欲しい。（※欠席者からの意見）

○高齢者福祉について

- ・高齢者の孤立化が問題となっている中で、高齢者同士のふれあいの場を確保することは必要であると考えている。
- ・社会福祉協議会でも、一人世帯の高齢者の方々に集まってもらうような取組については行っているが、これらの取組の中心となる担い手を確保することが難しい。従

来、民生委員・児童委員をお願いしてきたが、仕事を持ちながらの状況では忙しく、50代～60代の方をお願いすることが難しくなっている。

- ・漁村においては、老人が自然と集まる場所がある。そういった場所へ、椅子を置くなど、環境を整えることが有効であると考えている。

○ファミリーサポートセンターの利用促進について

- ・伊勢市と玉城町、度会町、大紀町、南伊勢町が連携して行うとなっているが、市町担当者と委託先が協議すれば、すぐにでも実施可能ではないのか。
→（事務局説明）検討を行う内容として記載しているので、ご理解いただきたい。
- ・提供会員の確保を課題と捉えているが、依頼会員の確保は必要ないのか。
→（事務局説明）依頼会員に対する広報も必要であると認識しているが、一人の依頼会員に対して提供会員は、3分の1程度しかいない現状であることから、まずは提供会員を充実させたいと考えている。
- ・現状、依頼会員が提供会員の自宅へ子どもを連れて行って見てもらっているが、提供会員が依頼会員の自宅へ出向いて子どもを見ることはできないのか。
→（事務局説明）不可能ではないと思う。
- ・提供会員が依頼会員の自宅へ出向くスタイルであれば需要が増えるかもしれない。また、その場合に必要な経費を負担することなどについても検討して欲しい。

○公共交通について

- ・高齢者の足（移動）ということが、以前から課題になっていた。核家族が多く、自分ひとりでは出かけられない高齢者が多い。こういった課題を解決するために、デマンドバスは効果があると思う。外出するというのは、健康の維持、生きがい、緊急情報の発信など、様々な面で効果がある。玉城町においては、比較的小さな面積であり、センターから10分程度で迎えにいけるという恵まれた地域性がある。現在は点であるが、これが線となり面となれば、最高の地域福祉の向上に繋がると考えている。しかしながら、デマンドバスのしくみを各市町で取り入れるかどうかについては、財政問題など、様々な課題があると考えている。地域、事情に応じて進めていただければと思う。
- ・バスの利用者数は昭和40年代がピークで、現在は1/3程度となっている。都市部であればビジネスの利用があるが、本地域での利用主体は高齢者、学生である。ただ、伊勢営業所の管内においては、観光客が非常に多いというのが大きな特色である。
- ・全国的にバスの輸送人員は右肩下がりとなっているが、伊勢営業所においては、増え続けている状況である。地域の方々による両宮参拝のPR、渋滞対策などの効果が、鉄道利用へ転換し、それがバスにも繋がったと考えている。
- ・外宮内宮間の利用が圧倒的に多い。一方、伊勢、鳥羽、二見周遊線であるCANバスについても、輸送人員が増えてきている。内宮が起点となって、人の流れができ

ている。伊勢市内においての周遊バス、参宮バス（松尾観音－宇治山田駅－伊勢市駅－月夜宮－外宮－二見）も堅調に推移している。

- ・バス事業においては、当該地域は恵まれている方であるが、一般住民の足、地域の足については、利用者数との兼ね合いから十分な本数が供給できていない。この流れが、交通空白地を生み、コミュニティバス化が各地域で進んでいる。これまでは各地域で単独で取り組んできていたが、路線バスも含めて圏域において上手に結合することにより、交通利便の維持、向上を図っていくことが大きな課題である。現状においては、伊勢市の沼木線や度会町の中川線などが路線バスと引き継いでいる。
- ・伊勢市のおかげバス、鳥羽市のかもめバスも三重交通さんが委託を受けていると思うが、路線バス用のバスカードが使えない。広域で使えるしくみがあれば良いと思う。

○地域医療について

①総合病院について

- ・総合病院の問題では、10年程前までは、慶応病院、市立伊勢総合病院、日赤の輪番で三すくみ状況にあったが、現在は伊勢日赤病院に一極集中になっている。このことにより、患者サービスが低下しているのではないかと懸念している。市立伊勢総合病院の改築については、是非ともしっかりとやっていただいて、立派な病院を建設して欲しい。2つの大きな病院同士が切磋琢磨できる環境とし、この地域の住民の命を守って欲しい。

②夜間・休日診療所を含めた日常診療

- ・休日診療所の小児科医療の確保が課題となってきているが、このことに関しては、小児科診療を一部取りやめることとなったそうである。小児科医師を他地域から呼んでくるという手段も検討したが、成り手がいない状況であると聞いている。
- ・定住自立圏の精神から考えると、自分たちで何とかしないといけないと考えている。一方で、自分たちの実力に釣り合わないサービスを求めすぎているのではないかとということも思うところである。小児科医師に休日も含めて毎日見てもらえるという状態は、全国的に見ても少し贅沢ではないかと思う。この地域の実力としては、このレベルまでは及んでいないと考えている。
- ・市の事業というのは赤字が当たり前という中で、夜間・休日診療所については利益が上がっている状況である。医療関係者、スタッフが献身的に責任感を持って携わっていることで利益が上がっているのだと思う。
- ・医療をする側からみると、不適切な受診が非常に多いように思われる。半分以上そうである。3日前から熱が出ているのに、平日昼間に受診せずに夜に診療に来る、あるいは、昼間に受診したが心配なので夜にも受診に来るなどの例が多い。
- ・厚生労働省においても、「いつでも最高の医療が受けられる」状態から「必要なときに必要な医療が受けられる」状態に転換している。
- ・医療関係者から考える必要な医療と、患者側から考える必要な医療とに乖離がある

ので、その部分を埋めていく必要がある。広報などにおいても十分啓蒙し、この地域の医療を守って欲しい。

- ・昼間に受診していただいたほうが、医師としても十分力が発揮できる。休日夜間診療所は医師にとってアウェイの環境であり、知らないスタッフと道具も不十分な中でやっている。昼間来ていただいたほうが、医師も実力が出せると考えている。

○観光について

- ・現在、遷宮ブームで観光客が多くなっているが、このまま推移することは考えられない。
- ・遷宮をするまでには、お木曳き、お白石持ち行事などがあり、他県から多くの方が参加している。このことをヒントに、各地域の祭を神宮に奉納し、祭をテーマにした観光客の呼び込みをすればどうかと考えている。地域の特産物なども販売ができる。レギュラーなパンフレットなどで誘致活動もやっているだろうが、インパクトがないと感じている。
- ・圏域の祭を活用しながら観光に生かしていくしくみがあれば良いと思う。圏域内の祭については、私たちでも名前は知っていても実際には見たことがないものも多いと感じている。
- ・伊勢の伊勢まつりに、ここ2年位、斎王群行も入れてもらって参加しているが、伊勢には、一大イベントが必要であると感じている。
- ・自分たちの子どもの頃と比べると伊勢市の魅力は半分くらいになっていると思う。明和町のイオンに伊勢の人がたくさんやって来るが、伊勢の中心街に魅力がなくなってきているのではないかを思う。
- ・伊勢の魅力を高めることによって、伊勢市周辺の地域も良くなると思う。圏域全体で伊勢を盛り上げるような一大イベントをすることによって、圏域全体の魅力が高まっていくのではないかを感している。
- ・伊勢市で10月に行われている神嘗祭については、伊勢志摩キャンペーンの中で伊勢、鳥羽、志摩、南伊勢町が連携して誘致活動を行っている。ガイドブックなどを通年25万部程度作成し、全国に発信するなどの取組を行っている。
- ・去年は伊勢神宮に1420万人という多くの方にお越しいただいたが、果たして鳥羽・志摩・南伊勢に流れたかどうかというと厳しい状況であったと感じている。内宮前の交通渋滞などについても風評被害が出ている状況などもあり、両宮を参拝したら、北勢・名古屋に宿泊するなどし、伊勢志摩地域の周辺観光に繋がっていない状況にある。
- ・1年の中でもヘソを作っていないと集客に繋がらない。秋口は繁忙期になるが、1月から3月は伊勢市は賑わうが、鳥羽、志摩などは寒い状況になるので、なんとか底上げをしたいと考えている。

○全般について

- ・定住自立圏構想という制度自体が、市や町の垣根を飛び越えて、足りないところを

- 広域で補完しあいながら、地域全体として元気になっていこうというものである。
- ・行政だけで考えているだけでは足りないところがあるので、皆様のご意見を聴きながら進めていくことが大切である。
 - ・東京にいる人からすると三重の知名度は低いが、伊勢神宮や伊勢海老のことを知らない人はいない。伊勢志摩地域の特定のブランドがあれば良いと考えている。産業でも観光でも全部含んだ伊勢志摩ブランドを作って一緒に売っていくことが有効であると感じている。
 - ・人口減少社会になっていくことは止めようがないと思うが、定年後の団塊世代の方の力を活用していくしくみもあれば良いと思っている。ただ、行政等が主体で始めると行政に依存しすぎてしまう恐れがある。要求だけ強くなって自分たちでやっていこうという力を弱めてしまう。
 - ・皇學館大学では、地域の課題を考えさせるという訓練を通じて地域で学生を育てていくという取組、文部科学省の「知（地）の拠点整備事業」に取り組んでいくところである。地域の課題と一緒に取り組んでいきたいと考えている。

以上